

# 踏み跡 <My Mountains>

丹沢	四十八瀬川右俣(勘七の沢)廻行	No.146
----	-----------------	--------

昭和45年2月24日

4月に結婚するという阿部さんが、「最後に沢登りをしたい」と言うので丹沢へ入ることにした。

新宿を7時01分発の急行で発ち、渋沢から大倉に入るともう9時を回ってしまう。

二俣で朝食とも昼食とも言えぬような食事をとり、結局勘七の出会いから沢に入る頃にはもう正午。

沢登りは一年前の背戸の沢右俣以来のことなので、F1、F2あたりはどことなく腰が入らず恐怖感があり、腰が入らずぎこちない。

F3あたりで手を濡らしてみても、やっと調子が出てきた。

F5の直下で飛沫を浴びながら中休止。F5はガイドブックの写真に比べると数メートル低くなっている。それは、土砂で滝壺が高くなってしまったせいと思われる。中段のバンドもさほど高く感じないし、水際の直登のホールドもかなりしっかりしている。初めてこの滝を登った時に比べると随分楽な感じがする。沖の左俣を分けるあたりから雪が降って来て、やがてガレをつめて花立に飛び出る頃には濡れた手が寒さで赤くなるほどになってきた。

冬の大倉尾根は例によって霜解けの泥んこ道。泥んこの尾根に静かに模様を付けて行く白い雪が美しい。

堀山辺りでもう周囲は真っ暗になり、何度か手探り歩きを余儀なくされた。

大倉に着く頃にはもうストーブの温もりが欲しくなる18時40分。

まだ二月、電車の暖房が何よりありがたい帰途だった。

以上

